

戦う詩神

— ロシアにおける第一次世界大戦と女性詩人 —

中尾泰子

序

「20世紀は、1914年の秋、戦争の勃発とともに始まった。19世紀がウィーン会議から始まったように。暦の日付けには意味がない」¹とアンナ・アフマトワ（1889-1966）は記している。そして、第一次世界大戦が勃発した当時は、ほとんど誰一人として戦況を把握する者がいないまま、ロシアの一部の詩人たちは即座に「戦争」に反応し、詩作することが求められたのだった。

ロシアでは、戦争及び闘争といった概念は、1914年以降芸術において支配的なメタファーとなった。実際、他の当事国においても「戦争」は文学を含む芸術一般の一つの革新的なテーマとなったのである。大量殺戮戦争と革新的芸術——戦争が美学における革新の起爆剤となったこと——これは20世紀における戦争の一つの特徴である²。さらに、この戦争はロシアにおいては文学流派同士の「闘争」の火種ともなった。

本稿ではまず、当時の主要文学流派の一つであるアクメイズムが、女性詩人を「戦争」という「男性的な」領域から排除するのではなく、むしろその領域に取り込もうとした言説を取り上げて検討し、さらに開戦直後に書かれた女性詩人たちのテキストについて考察を試みたい。

1 未来派とアクメイズムとの闘争

ウラジーミル・マヤコフスキーが編集責任者を務める文芸誌『レフ』の創刊号（1923）の綱領では次のように書かれている。

1914年の戦争は社会への最初の試練だった。

ロシアの未来主義者たちは、マリネッティがモスクワを訪問した時に（1913年）、すでに口笛を鳴らしてやったものだが、詩的帝国主義もろとも彼を断固

として引き裂いた。

未来主義者たちはロシア芸術において最初にして唯一、戦争賛美者（ゴロデツキー、グミリョーフなど）が四の五の言うのをかき消し、戦争を呪い、芸術のありとあらゆる武器で戦争と戦った（マヤコフスキーの『戦争と世界』）³。

ちなみに、マヤコフスキーの『戦争と世界』が書かれたのは、1915年から翌年にかけてのことである。戦争に賛成するか、反対するか、その態度表明は文学流派という共同体の結束に関わるものであり、その存在意義であり、ひいてはその相互の抗争に発展していったのだった。ただし、未来主義者たちも戦争を歓迎したことは疑いない。戦争は彼らの闘争的な芸術的手法を正当化し（そもそも先に引用した檄文は「レフは何を求めて戦うか」と銘打たれている）、彼らは栄光とヒロイズムに彩られたロマンティックな戦争観を共有していたからである⁴。

それでは、『レフ』誌において「戦争賛美者」と名指しされたセルゲイ・ゴロデツキーやニコライ・グミリョーフらアクメイストが中心となって発行していた雑誌『アポロン』の第一次世界大戦の受け止め方はいかなるものだったのか。戦争に対するアクメイストたちの反応も極めて早かった。世界大戦は1914年7月に勃発したが、同年6-7号にはこの戦争をテーマとした数篇の詩が雑誌の巻頭を占めたのである。

これらの一連の詩は8号でゲオルギー・イワーノフによって「戦争詩」военные стихиと名づけられることになるが、イギリスでもS・サースンやW・オーエンらが「戦争詩人」と括られていることを想起すれば、特別な名称と考えなくともよいだろう。イワーノフが述べている「戦争」は、極めて概念化された戦争ではあるが、イワーノフの言葉によれば「古いぼれたモダニズム」に新鮮な息吹をもたらすものとしてあからさまに歓迎されている⁵。それは、未来派にとってと同様、文学流派の旧勢力を打破するものだった。その証左のように、巻末の「芸術時報」では、「芸術と戦争」と題したコラムが連載されるのである。

また、『アポロン』1914年10号に「攻撃」と題する非常に好戦的な詩を掲載した「戦争賛美者」グミリョーフは、イタリアの愛国主義者ガブリエーレ・ダヌンツィオに捧げた頌詩の中でも「あのこのうえなく美しき戦争の日々」⁶と謳い、それはまさにイタリアの未来主義者エミリオ・マリネッティの「戦争は美しい」という言葉を想起させた。

2 『アポロン』における女性詩人

本節では、女性詩人による戦争詩を取り上げて、「戦争」という国家的事象につ

いて書くという行為が、いかにジェンダーに関わっているかを明白にしたい。詩に限らず、女性の手による戦時中のテキストに関する研究は、欧米はもとより日本でもさかんに行われているが、果たしてロシアにおける女性のテキストはどのような運命を辿ったのだろうか。

先に述べたイワーノフは『アポロン』1915年1号において、女性詩人による戦争詩を取り上げて論評している⁷。この論評を一読すれば、「戦争」について書くという行為が、男性ジェンダー化されていることがわかるだろう。この論評は次のような挑発的な調子で始まっている。

女流詩人たちが「戦争」詩を書くということにおいて（男性—引用者）詩人に後れを取っているわけではない。〈中略〉残念なことに、アンナ・アフマートワはこれまでに『アポロン』の読者に知られている卓越した詩を三篇しか掲載していないし、Z・ギッピウスの詩のうち、我々は先の展望で指摘した一篇にしかお目にかかっていない。あとは我々をそれほど喜ばしてはくれなかったM・モラフスカヤの戦争抒情詩を俎上に載せるだけである。わずかながらも真っ当であったもの、彼女たちの子供向けの詩においてさえ魅力的だったものが戦争詩を取り返しがつかないほど駄目にしてしまう。感傷的な調子、気取っていて表情に乏しい言葉、締りのない詩——それらがこの女流詩人の詩に特徴的な本質である。

さらに、イワーノフは「女流詩人」マリーナ・モラフスカヤの「戦争抒情詩」を引用してみせる。

毎晩私は戦争の夢を見る
ああ 戦闘を目にするほうがまだ
このような悪夢の影ほど
多分死は恐ろしいものではない

この詩について、イワーノフは次のような辛辣な評価を下している。

このような「啜り泣き」が誰に必要なのか——不明である。我々の趣味からすれば、このようなものには心を動かされないし、哀れを催すこともない。ただ、退屈なだけである。

かつて、ジーン・ベスキー・エルシュタインは「女性が戦争をイメージすると現実の戦争とはあまり関係のない、抽象的な紋切り型になりがちである」⁸と述べたが、ロシアにおいて戦争詩を書いたのは、『アポロン』の中心人物グミリョーフを除けば、性別を問わず、必ずしも従軍経験のある者ばかりではなかった。実際の戦争を経験していないモラフスカヤが、ここで戦争の実態を知りたいと望んだとしても、それはごく自然なことではなかっただろうか。

女性詩人を槍玉に挙げながらも、イワーノフは彼女たちに対して文学による「戦争参加」を望んだのであった。しかも、参戦する場合は決して「感傷的」でもなく、「気取る」こともなく、言うなれば「男性のように」書くことを要請した。ここには『アポロン』に女性（詩人）を「動員」しようとするイワーノフの狙いが見取れる。彼はアクメイズムと未来派との差異化を目論んだのであろうか。それと同時に、『アポロン』に参加する女性たちに警告を発したのであった。

3 アフマトワの戦争詩

ここで、イワーノフに名指しで非難されたアフマトワやギッピウスのテキストを取り上げたい。ロシアの女性詩人たちによる戦争詩は、これまで全くと言ってよいほど研究者の関心を引くことがなかった。しかし、湾岸戦争以降、戦時下における「知識人」のあり方が火急の問題となっている現在、彼女たちのテキストを再検討することは屋上屋を架すことにはならないだろう。

フーバータス・ヤンは、第一次世界大戦期のロシアの文化状況について書かれた著書の中で、『アポロン』1914年6-7号に掲載されたアフマトワの「1914年7月」と「慰め」について「アフマトワはこの戦争を単に人類の大なる悲劇だとみなしていた」⁹と評している。「1914年7月」は反戦詩のようにも読めるテキストだが、その訴えるところは、戦争の賛美ではないが、実は戦争の否定でもなかったのである。数人の研究者が指摘していることだが、戦時中、多くの詩人を捉えていたのは、宗教、つまりキリスト教だった¹⁰。それはアフマトワの「慰め」でより顕著になるのだが、ここではまず「1914年7月」を取り上げたいと思う。このテキストでは、古きロシアの民衆世界と聖書の世界とが融合している。

1914年7月

I

(略)

太陽は神の寵を失い

復活祭の日から雨は野原に降らなかった
一本足のさすらい人がやって来て
一人中庭でこう言った

恐ろしい時が近づいている じきに
真新しい墓で埋め尽くされるだろう
飢饉と地震と疫病と
日食を待て

敵はただ慰めに
我らの大地を分かちほさないだろう
そして 聖母は白いプラトークを
大いなる不幸の上に広げるだろう

II

燃え上がる森から
ねずの甘い香りが漂う
子供たちの上で兵士の妻たちは呻き
寡婦の号泣が村中にひびく

(略)

(198-199 頁)

第一部第二聯・三聯では「一本足のさすらい人」によって予言がなされ、第二部第一聯で「兵士の妻たち」「寡婦」という銃後の女性の悲痛が描かれる。ここでの予言はエレミヤ書にあるものとほぼ同じである。エレミヤ書の第 14 章に次のようにある。「主はわたしに言われた。『この民のために祈り、幸いを求めてはならない。〈中略〉わたしは剣と、飢饉と、疫病によって、彼らを滅ぼし尽くす!』(新共同訳による)。

しかし、この予言を告げる「一本足のさすらい人」とは何者だろうか。考え得るのは、ロシア正教における「聖なる愚者」ユロージヴィである。身体的欠陥と予言能力という点がまさに一致しているからである。むろん、ユロージヴィは必ずしも身体的欠陥のある者とは限らない。しかし、「ユロージヴィ」の語源となっている「ウロード」という言葉はもともと「身体的欠陥を持つ者」を意味する。また、アフマトワはユロージヴィと思しき予言者を他の作品にも登場させている。反戦詩であれ愛国的な詩であれ、詩人が「戦争詩」にこのような宗教的(あるいは神話

的)要素を取り入れることは、アフマートワに限らなかつた(マヤコフスキーの『戦争と世界』にも見受けられる)。西欧世界に対して、あえて「古きよきロシア」を打ち出そうとするスラヴ主義的な思想の一端を読み取ることも可能だろう。そして、第一部の最終聯で荒廃したロシアを悲しむ「聖母」を登場させ、あたかも戦争における女性の役割を代弁させて、この詩の前半は閉じられる。

一方、「慰め」は戦争で息子を失った母親に呼びかける形で書かれている。この詩のエピグラフにはグミリョーフの長詩『ミーク』の一節を引用している。次のような一節である。

大天使ミカエルはそこで
彼を自分の軍勢に引き入れた

そして、この詩の第二聯には次のようにある。

汝の魂を静かに穏やかにあらしめよ
失われた者はない
彼は神の軍勢の新しい一員なのだ
もはや彼のために悲しんではならない (208頁)

この一節は、戦争当時人々の心を支配していたキリスト教に基づく典型的な思考を如実に示すものである。たとえ自分の子供が戦死しても、それは神のもとに帰ったのだ(「神の軍勢の新しい一員なのだ」という考え方は、当時戦争に参加していた国々の詩人には根強かつた。まさにこの点において、アフマートワの戦争詩は、限りなく保守的であり、ほとんど陳腐とさえいえる。

「1914年7月」では夫や子供の死を嘆く女性たち、あるいはロシアのために悲しむ聖母を登場させて、戦時中の絵に描いたようなジェンダー・ロールを踏襲していた。一方「慰め」では「神」と「軍」とを巧みに結びつけ(「神の軍勢」、まるで日本における「軍国の母」のような精神を謳っている。しかし、このテキストを「女性の戦争責任」と単純に批判することはできないだろう。当時は、キャバレー(酒場)で朗読されるような作品であり、その時代には受け入れられていたのである¹¹⁾。

4 ギッピーウスとツヴェターエワ

次にジナイーダ・ギッピーウス(1869-1945)に移りたい。『アポロン』誌上で戦争

詩を書いていないことをイワーノフには非難されているが、ギッピウスは実際には非常に多くの戦争詩を残している。イワーノフが『アポロン』で言及した「先の展望で指摘した一篇」を特定することは困難だが、イワーノフの発言から年代的に推測すると次の詩になるだろうか。「もっと静かに！」と題された詩の中で、ギッピウスは詩人たちに対して、ひいては戦争詩を書くという行為について、1914年の8月8日にこう書いている。

もっと静かに！

偉大なる業は声高である

ソロゲープ 1914年8月7日

詩人たちよ あまり早く書くべきではない
勝利はまだ神の手にあるのだから
今日はまだ傷口がくすぶっている
今日はいかなる言葉も必要ではない

いわれのない苦しみと
決着のつかない戦いの時に
沈黙の廉潔が必要なのだ
そしておそらく静かな祈りが必要なのだ

(205頁)

この冒頭の一文は、イワーノフのような、即座に「戦争」に反応するべきだと考えた詩人の怒りに触れたことだろう。ギッピウスはアフマートワと比較すると、明白に戦争に反対した詩人であった。

また「弁明なし」(1916)という詩では、ギッピウスは次のように書いている。

最後の時 闇の中 炎の中
心をもって忘れしむるな
戦争には言い訳など存在しない
今後もしない

そしてもしこれが神の掌なら――
血にまみれた小道――
私の魂は彼とでさえ戦うだろう

神に対してでさえ立ち上がるだろう

(214 頁)

しかし、「戦争には言い訳など存在しない」と主張するギッピウスも、「神に対してでさえ立ち上がる」と宣言しており、戦争は「神が支配する」というキリスト教的な考え方、つまり「神」の存在から完全には逃れることはできなかった。「戦争」はギッピウスにとっても、「人間」ではなく「神」の手によるものだった。

一方、イワーノフに『アポロン』でも名指しされることのなかったマリーナ・ツヴェターエワ (1892-1941) は、キリスト教の色濃い戦争観を共有していなかった点で、先に取り上げた二人の詩人とは異なる。1914 年 7 月 16 日に書かれた「戦争 戦争だ！」で始まるテキストを取り上げてみたい。

戦争 戦争だ！——聖像のケースに香をたき込め
拍車の音
ツァーリの計算など知ったことではないし
国民の口喧嘩も同じだ

綱——たぶん少しひびの入った——の上にいる
私は——小さな踊り子
私は誰かの影の影 私は夢遊病者
二つの暗い月の

(210 頁)

このテキストでは「二つの暗い月」という表現が用いられているが、これはドイツとロシアという二つの国を指していると考えられる。第一次大戦が勃発する以前に、ツヴェターエワは「ドイツに寄せて」(1914) と題した詩の中で「ドイツ——私の狂気！／ドイツ——私の愛！」(231 頁) とドイツへの愛情を記している。

しかし、その愛情に反して、ドイツとの開戦当時は、『アポロン』等でもドイツに対する批判的な強い論調が巻き起こっている。第一次世界大戦が勃発すると、『アポロン』の巻末の「芸術時報」には「戦争の野蛮行為」と題したコラムで、ドイツの「野蛮行為」に対する非難の言葉が延々と記されている。引用してみよう。

この野蛮行為は民衆を、我々のかくも長きにわたる芸術に対する敬意を永久に破壊した。＜中略＞その野蛮行為は目下芸術界全体の痛ましい憤怒を引き起こしている¹²。

このような論調が大勢を占める中で、ツヴェターエフは自分のロシアに対する愛情とドイツに対する愛情とに切りさかれていた。それがこの「私は夢遊病者／二つの暗い月の」——二つの月に渡された綱の上をふらふらと歩く踊り子のイメージで表わされている。だが、ツヴェターエフには少なくともロシアの敵、つまりドイツの姿が見えていた。また、恐らくそのために、ツヴェターエフは非常に明快な次のようなテキストを残したのである。

私は真実を知っている！ あらゆる昔からの真実を——あっちへ行け！
この地上では人が人と戦ってはならないのだ (245頁)

このテキストこそはっきりと戦争を否定するものだった。アフマトワのテキストは自国民の死を悼むに留まっていた。ツヴェターエフはもう一步踏み込み、人が人と戦うこと、その結果、人を殺めることを強く諫めたと見えよう。あなたの息子は「死んだのではない」と論ず代わりに、他人を「殺してはならない」と言い切ったのである。二人のテキストはこの点においてははっきりと一線を画していることを強調しておきたい。

結 語

第一次世界大戦は、ロシアにおける文学流派の闘争を激化させた。女性詩人にも「参戦」が求められる中で、アフマトワは夫の死を嘆く「戦士の妻」を謳い、息子を神に捧げる「戦士の母」を謳った。ギッピウスは戦争の正当性を認めようとせず、神にさえ対峙しようとする姿勢を見せた。そして、ツヴェターエフは戦争の「真実」を見抜き、「人が人と戦う」戦争を真っ向から否定した。この後、1917年に勃発した社会主義革命を巡って、ふたたび作家たちの意見は大きく分かれることになる。

ここで、ドイツが対ロ宣戦を布告したため、この時初めて「ロシア人」は「我々」の立場でものを語るできるようになったことを付け加えておきたい。ヤンによれば、第一次世界大戦によってナショナル・アイデンティティが確立されたのだ¹³。現在しきりに用いられる用語で言えば、国民主体の創出がなされたのである。ここで取り上げた三人の女性詩人たちは特別に「国家」に取り込まれることもなく、ただ、戦時下のロシアの大地に存在する人々に思いを馳せてテキストを産出した。それは、女性にはまだ「国民」としての資格が与えられていなかったからかもしれない。

最後になるが、第二次世界大戦中の女性詩人について簡単に触れておきたいと思う。1917年の革命で男女に平等の権利が保障され、スターリン時代には、女性の労働力が求められ、「女性の国民化」、つまりそれまで男性中心だった領域に女性が踏み込んでいくことが、急速に推し進められた。ギッピウスやツヴェターエワがジェンダー・ロールにとらわれず、戦争に反対の意を表明したからといって、女性が「平和主義者」であるというような意見を振りかざすつもりはない。女性詩人たちもスターリニズムのもとでは、愛国主義的なテキストを量産していくのである。

第二次世界大戦中、アフマトワは「勇氣」(1942)という詩を書いた。この詩には、次のような一節がある。「そして私たちはあなたを守る ロシア語を／偉大なるロシアの言語を」⁴。ここでは、アフマトワは明らかに「ロシア国民」として書いている。女性も従軍していた当時、最も有名だった作品は、スターリン賞を受けたマルガリータ・アリゲールの長編詩「ゾーヤ」(1942)であろう。ここで、彼女は18歳のパルチザンの少女ゾーヤを主人公に、大戦の「英雄的」女性像を構築していく。そこに描かれているのは、まさに前線で「男性のように」戦い、死んでいく少女の姿だったのである。

註

本稿で用いたアフマトワ、ギッピウス、ツヴェターエワのテキストは次のものである。

Ахматова, Анна. *Собрание сочинений в шести томах, том 1* (Москва: Эллис Лак, 1998)

Цветаева, Марина. *Собрание сочинений в семи томах, том 1* (Москва: Эллис Лак, 1994)

Гиппиус, Зинаида. *Стихотворения* (Санкт-Петербург: Академический проект, 1999)

なお、引用頁は本文中()内に付記した。また、本文中に引用する場合、日本語訳はすべて筆者によるものである。ただし、「1914年7月」は『アポロン』掲載時と上記テキストでは、第一部と第二部の配列が入れ替わっている。

- 1 Ахматова, Анна. *Сочинения в двух томах, том 2* (Москва: Художественная литература, 1986), с.248.
- 2 Norris, Margot. *Writing War in the Twentieth Century* (Charlottesville and London: UP of Virginia, 2000), p.1. ドイツの前衛作曲家カールハインツ・シュトックハウゼンは、2001年9月11日の同時多発テロ事件に際し、「これは宇宙全体で想像しうる最大の芸術作品である」と発言し物議を醸した。「戦争」は21世紀になった今も短絡的に「芸術」を引き寄せてしまう。
- 3 *Летопись, №1* (март, 1923), с.4.
- 4 Hodgson, Katharine. “Myth-making in Russian war poetry,” in *The Violent Muse: Violence and the artistic imagination in Europe, 1910-1939*, eds. Jana Howlett and Rod Mengham (Manchester and New York: Manchester UP, 1994), p.65.
- 5 Иванов, Георгий. “Испытание огнем (Военные стихи),” *Аполлон, №8* (октябрь, 1914), с.52.
- 6 Гумилев, Николай. *Собрание сочинений в четырех томах, том 1* (Washington: Victor Kamkin, 1962),

- cc. 262-263.
- 7 Иванов, Георгий. "Военные стихи," *Аполлон*, №1 (январь, 1915), с.58.
 - 8 ジーン・ベスキー・エルシュテイン「女性と戦争」小林史子・廣川紀子訳（法政大学出版局、1994年）333頁。
 - 9 Jahn, Hubertus F. *Patriotic Culture in Russia during World War I* (Ithaca and London: Cornell UP, 1995), p. 106. А·Павловскийも次のように述べている。「アフマトワの認識では、戦争は常に大なる不幸であり、悲劇であり、悪であった。しかし戦争を適化芝居に変えてしまうこと、さらにはそれを賛美すること、つまり死を褒め称えることのほうが、より大きな悪であり冒涇であった。このことに関しては、アフマトワは疑いようのない計り知れぬ民衆の苦しみにもかかわらず、戦争を賛美する文学とは果てしなくかけ離れていた。」 Павловский, А. И. *Анна Ахматова: Очерк творчества* (Ленинград: Лениздат, 1982), сс.51-52.
 - 10 Caesar, Adrian. *Taking it like a Man: Suffering, Sexuality and the War Poets Brooke, Sassoon, Owen, Graves* (Manchester and New York: Manchester UP, 1993), p.5.
 - 11 Jahn, Hubertus F. p.106.
 - 12 *Аполлон*, №6-7 (август-сентябрь, 1914), с.122.
 - 13 Jahn, Hubertus F. p.177.
 - 14 Ахматова, Анна. *Собрание сочинений в шести томах, том 2-1* (Москва: Эллис Лак, 1999), с. 16.